創刊にあたって

学　長　　中野和朗

大学改革の流れは、ますます勢いを増しています。改革というのは、現状を良くするために行うものですから、改革によって大学は良くならなければならないでしょう。大学は、あらためて指摘するまでもなく、**研究所ではなく、高等教育機関**と法的にも定められています。ですから、改革によって、大学を良くするということは、大学の教育を良くするということです。大学の教育の内容、教育のあり方、教育方法などを改善することです。ところで、大学の教育がその他諸々の教育と峻別されるのは何でしょうか？それは、個々の大学教員の専門的な研究、あるいは専門的なキャリアがその授業のベースとなっていて、それが授業に反映されるという点にあります。大学の教育が専門的な研究や、キャリアと密接に結合したもので、不即不離の関係にあるとなれば、大学は研究所ではないけれども、大学にとって、研究は不可欠なもので、決して疎かにされてはならないのです。昨今の大学改革の論議に教育改善を強調するあまり、研究は二の次でもよいと言わんばかりの見解が散見されますが、これはとんでもない間違いです。良質の大学教育の保証のためにも大学では研究は重視されなければならないのです。したがって、高等教育機関である**大学の教員は、基本的には、まず教育者**でなければならず、なお**かつ専門研究者**でなければならないということになります。これが、大学教員の**専門職**たる要件です。大学教員に特別な勤務形態が容認されているのも、このような専門職としての特殊性が重視されてのことです。大学教員にはすべからく、このような専門職としての明確な自覚が望まれます。さしたる研究もせず、教育も拙劣などというのは論外としても、研究さえしていれば、教育は拙劣でも、大学教員として認知されてきたこれまでの社会的寛容さにあぐらをかき続けることはもはや許されないことです。これからは、優れた研究をし、なおかつその研究成果を学生に適切に伝達できる教育的力量を併せ持っていなければ、**適正な大学教員**とは評価されないでしょう。大学の「紀要」も、これまでは、およそ教育への関心が欠落した“研究者”の形骸化した研究、ともすれば“陳腐化”したとしか表現できない研究さえまかり通っていました。しかし、新しい大学の「紀要」は、高等教育機関の専門職に相応しい**“教育・研究の専門家”**の業績の公表の場となることが求められているのです。

大学の善し悪しは、偏に、優れた研究能力と優れた教育能力双方を併せ持つ優れた教員スタッフがどれだけ揃っているかに掛かっていると云えます。「紀要」は、当該大学の教員スタッフの質を、従って当該**大学そのものの質**を天下に問うものとなります。社会に通用する活きた論文、そして、 **教育の現場の紀要**に相応しく、教育者の自覚が基底に貫流している論文の登場を期待します。

ところで、これまで、松商学園短期大学は、「松商短大論叢」を発行してきましたが、平成14年4月に松本大学「総合経営学部」が創設されたのを期に、「松商短期大学部」と名称を変更し、学部、短大部両者合同で、新たに「松本大学研究紀要」を発行することになりました。本号は、「松本大学研究紀要」の創刊号ですが、通巻号数は「短大論叢」の号数を継続することにしました。広くご高覧に供し、ご高評を仰ぎたく思います。